

F-13 「家庭生活」領域における家族概念についての検討  
北海道教育大学 中屋紀子

目的 家庭科の「家庭生活」領域における家族概念は、家族のなかでの性別役割構造を固定化し、さらに理想的な家族像が押しつけられるような表現が用いられているために、道徳主義的な色彩が濃い等、従来から批判されてきた。これらの諸問題をもたらしつつは、家族概念の概念構成に根源的な原因があるのではないかと考え、家族概念の検討を行った。

方法 家庭科の教科書での家族がいかに把握されているか、をヒラエ、その家族概念形成の論拠を探り、検討する。

結果 家族の概念規定において、家族構成、家族の機能が重要な位置を占めている。家族構成は、家族の形態上の一側面を説明する。現在までの家族社会学は、家族構成を一つの手がかりにして、家族研究を展開してきている。にもかかわらずここには、家族の構成にとどまらず、家族の機能は、実在する家族を一つの典型としてとらえ、そこに存在する働きを機能として把握するのではない。家族の発生から今までにいたる歴史を越えて、家族に存在する機能を抽出し、それらを集積し、一つの理想的な家族を規定する。これを用いて、現実の家族を説明する。それゆえ、機能は、一歴史的時代に限定して存在する場合、為弊の対象からはおとされる。しかも、機能概念は、家族集団と他の集団との間の連関をもつ概念に示される。そのために、家族と他の集団(社会)との連関が常に念頭におかれており、社会を構成する一単位としての家族が位置づけられる。家事労働、生活時間、家計などの家庭経営に関する「知識や技術」は、ここに規定された家族概念のもとに位置づけられ、さらにこれを補充するものとなっている。